

コミュニケーションの一手としてのカモフラージュ

浅利 みなと (Minato Asari)

東京都立大学

動物のコミュニケーションを研究対象とする論者の多くは、動物のコミュニケーションをいわば擬人的に捉えてきたと言って差し支えないだろう。このことは特に次の二つの点によく現れている。一つ目は、動物のコミュニケーションとは、Grice (1975) が前提するような一定の目的を共有したプレイヤーたちによる協調的なゲームであるという前提がしばしば暗黙理に敷かれている点である。二つ目は、Grice (1975) が推意という意味の層を抽出し、その導出メカニズムを描き出したように、動物のコミュニケーションの研究の中心的課題もまた、コミュニケーションの一手となる振る舞い—シグナル—が担う情報とその情報が伝達される理由や仕組みを理論的に説明することである、と考えられてきている点である。例えば、Zahavi (1975) に始まるハンディキャップ理論によるガゼルのストットティングの分析は、この二つの点をよく表している。ハンディキャップ理論は、捕食者と獲物のあいだにもある意味で協調的な関係が成り立つと考え、一見すると個体の適応度を下げるかのように見えるシグナルが伝達する情報を特定し、そのように考えるべき理由を説得的に論じた。もちろん、Krebs and Dawkins (1978) のように、動物のコミュニケーションを協調的な情報伝達の営みとして考えることに反対する議論はあるものの、上述のような基本姿勢は動物のコミュニケーションの研究者の多くに共有されていると言って良いだろう。

このような研究に対する基本姿勢のもとで、動物のカモフラージュ (Camouflage) はその適切な位置を与えられてこなかったように思う。動物のコミュニケーションを研究する論者のあいだでは、カモフラージュは次のいずれかの立場で取り扱われることがほとんどであった。一つは、動物のコミュニケーションの研究対象からカモフラージュをそもそも除外するという立場である (Maynard-Smith and Harper, 2003; Scott-Phillips, 2008)。この立場によると、ある振る舞いがコミュニケーションにおける一手、すなわちシグナルと見なされるためには、まずもって受け手にその振る舞いを検出してもらう必要がある。しかし、カモフラージュは検出されないためにデザインされた振る舞いであるために、シグナルの定義を満たさない。ゆえに、動物のコミュニケーションの研究対象ともならない。もう一つの立場は、嘘 (lying) ないしだまし (deception) といった概念のもとで擬態 (mimicry) と共にカモフラージュを一般化する立場である (Sober, 1994; Font, 2019)。この立場によれば、擬態をする個体と同様に、カモフラージュをする個体は想定される受け手に偽なメッセージを発しているものとして理解される。動物のコミュニケーションの研究課題は、ある振る舞いが担う情報とその伝達の仕組みの解明にあるという方針に基づけば、このようなカモフラージュの扱い方にはそれぞれ一定の理がある。しかし、本発表ではどちらの立場にも与しない。私は、情報伝達ではなく情報遮断のためにデザインされた振る舞いとしてカモフラージュを取り

出すことを提案し、このような振る舞いもまた広い意味での動物のコミュニケーションの研究対象に組み込むことの意義を主張する。そして、このようにして情報を遮断するためにデザインされた振る舞いに着目することが、人間のコミュニケーションの研究にどのような視座をもたらせてくれるのかについても、私見を述べようと思う。

参考文献

- Font, E. (2019). "Mimicry, Camouflage and Perceptual Exploitation: The Evolution of Deception in Nature," *Biosemiotics*, 12(1), pp. 7-24.
- Grice, P. (1975). "Logic and Conversation," in P. Cole, and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, Vol. 3: Speech Act*, New York: Academic Press, pp. 41-58.
- Dawkins, R and Krebs, J. R. (1978). "Animal Signals: Information or Manipulation?" in J. R. Krebs and N. B. Davies (eds.), *Behavioural Ecology: An Evolutionary Approach* Oxford: Blackwell, pp. 282-309.
- Maynard-Smith, J. and Harper, D. G. C. (2003). *Animal Signals*, Oxford: Oxford University Press.
- Scott-Phillips, T. C. (2008). "Defining Biological Communication," *Journal of Evolutionary Biology*, 21(2), pp. 387-395.
- Sober, E. (1994). "The Primacy of Truth Telling and the Evolution of Lying," in E. Sober, *From a Biological Point of View: Essays in Evolutionary Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 71-92.
- Zahavi, A. (1975). "Mate Selection: A Selection for a Handicap," *Journal of Theoretical Biology*, 53(1), pp. 205-214.